

親の不在状況からみる子どもとのかかわりの変化：

中国における CFPS データの分析から

○夏 天（慶應義塾大学大学院社会学研究科）

1. 報告の目的

本研究は、中国における「外出労働」に起因する親の不在状況の変動によって、子どもとのかかわりがどのように変化するかを計量的に検討することを目的とする。親の不在と子どもの不平等の再生産は家族社会学の重要な課題である。日本やアメリカにおける親の不在は親の離婚・死別、婚外出生によるものが多いが、中国における親の不在は「外出労働」（親の就労目的による国内移動）によるものがほとんどである（Ren and Teriman 2016）。これまでの研究は「外出労働」に伴う親の不在が、子どもの大学進学希望と高校進学に不利であることが明らかにされている一方で（Sun et al.2020; 夏 2021; 2023）、その不利を説明するメカニズムについてまだ明らかではない。「外出労働」による親の不在は親の離婚や死別などに比べて流動的であり、子どもの養育を担う主養育者が頻繁に変わりうるという性質を持っている。また、Lereau (2011)は養育形式の学歴階層化について指摘し、低学歴層の親は「自然的養育」をするのに対して、高学歴層の親は「意図的養育」をするという。

そこで本研究は主養育者の続柄と学歴に注目し、それらの変化と子どもとの関わりの頻度の変化との関連について検討する。

2. データと方法

北京大学社会科学調査センターによるパネルデータ「China Family Panel Studies」(CFPS)を用いる。母集団は中国全国の親族世帯であり、調査対象者は当該世帯内のすべての個人である。層化多段無作為抽出によって標本抽出が行われている。2010年より2年間隔で追跡調査が行われている。分析において、2010年から2020年までの6時点のデータを使用する。分析対象はふたり親世帯で、使用する変数に欠損値のないものである。サンプルサイズは6,000弱である。

分析は主に以下の3つである。まずは記述的分析について、親の不在状況の経時的変化と、親の不在状況別の主養育者の続柄について検討する。次に、子どもとの関わりの規定要因について固定効果モデルによって観察されない異質性を統制し、個人内効果について検討する。

3. 暫定的な結果

親の不在状況は、各調査時点の前年度の父親、母親のそれぞれとの別居期間により、「両親同居」・「父のみ不在」・「母のみ不在」・「両親不在」の4つのカテゴリーに分類した。時点ごとの親の不在状況の変化は概して大きく、親の「外出労働」は個々家族の実情によって常に調整している様子が見えらる。主養育者は、子ども票の「親回答」部分の回答者である。母親が同居している場合に母親が主養育者である割合が最も大きい。「母のみ不在」では父親と祖父母で半々である。「両親ともに不在」では祖父母が多い。最後に固定効果モデルの結果によると、親の不在状況が「両親同居」から「両親不在」に変化すると、子どもとの関わりの頻度が減少する傾向がある。また、主養育者が母親から父親に変化すると、関わりの頻度が減少する傾向がある。

付記

The data are from China Family Panel Studies (CFPS), funded by Peking University and the National Natural Science Foundation of China. The CFPS is maintained by the Institute of Social Science Survey of Peking University.

本研究は、JSPS 科研費 20K02117 の助成を受けている。

(キーワード：親の不在、子どもとの関わり、主養育者の続柄)